

教師の乗り越え経験と周囲の支援に関する研究

～新人から中堅への過渡期を対象に～

国際文化研究科 国際文化専攻
臨床心理学研究分野 博士前期課程
2025年3月修了

有村 飛香里

主査 久保田 進也 副査 稲田 尚史 中富 尚宏

研究背景

我が国の労働市場は様々な問題を抱えている。令和3年度と令和4年度の離職者数と離職率を比較すると、離職者数は484,2千人、離職率は1.1ポイントの増加が報告されている(厚生労働省, 2023)。また、就職後3年以内に離職した者の割合(離職率)は2010年から2018年まで30%以上にものぼることが報告されている。

さらに、近年では、新人教師が増加していることに反して、若手や中堅の教諭が、精神疾患によって病気休職する現状がある。このことから、新人教師を支える先輩教員が継続して働ける環境を明らかにすることは喫緊の課題であるといえる。

研究目的

教師の乗り越えた経験に関する詳細なプロセスは明らかにされておらず、乗り越えを経験した教師について調査した研究は未だ少ない。

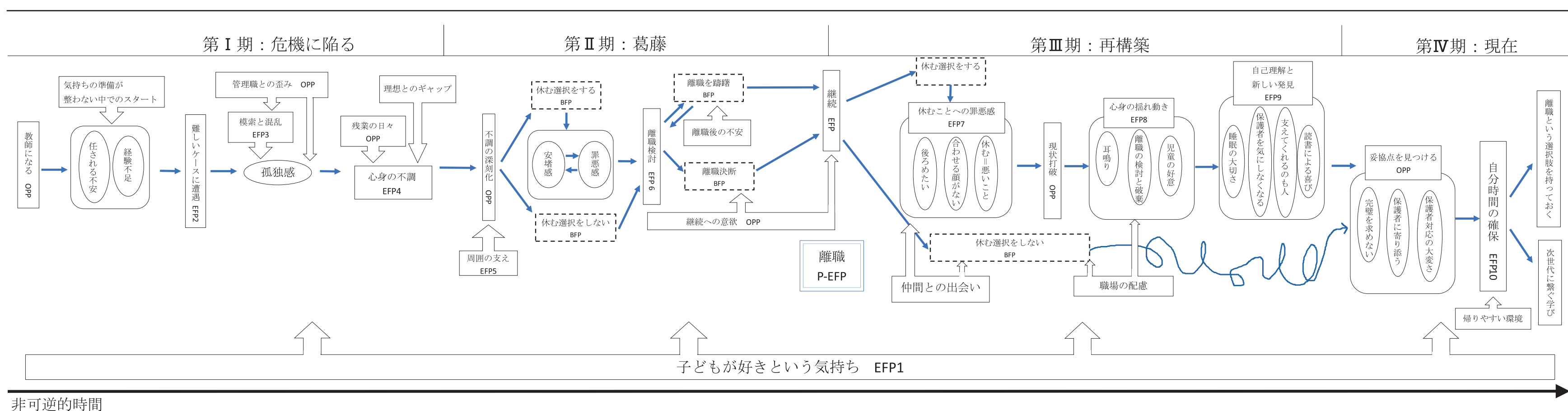
本研究では、離職の意思があったが退職せず、現在も教師を継続している教師であり、かつ「新人教師から中堅教師への過渡期にある教師」を対象とし、周囲からどのようなサポートを受けることで継続的な働き方へと繋がったのかについて、“時間的な変容”に着目して調査することを目的とした。

研究概要

対象：強く離職しようと思ったが退職せず、現在も勤務を続けている教師3名

方法：インタビュー調査を3回実施。離職意思を抱いたきっかけや分岐点等を明らかにする、複線径路・等至性モデル(以下 TEM)で分析した。

結果：第Ⅰ期「危機に陥る」、第Ⅱ期「葛藤」、第Ⅲ期「再構築」、第Ⅳ期「現在」という4つの時期区分が見いだされた。



成果・まとめ

対象者の語りから、教師が陥る危機や離職検討から現在に至るまでのプロセスにおいて、教師は児童や保護者への対応に関して苦戦した際、管理職のかける言葉やサポート提供のタイミングが重要となることが明らかとなった。またそれは、受け手にサポートとして伝わっているかによって自己成長に繋がる経験となるか否かが決まることが示唆された。

本研究の目的である、新人教師から中堅教師への過渡期にある教師の継続的な働き方について、新たな知見を示した。

本研究の結果は、近年の教育現場を取り巻く、教師の離職の増加や入職の減少という問題の改善や、ワークライフバランスの取れた教師を支える職場環境を構築する一助となることが期待される。



指導教員コメント

本研究の結果は、教師のメンタルヘルスの保持・増進や離職を抑制するための方法について新たな示唆をもたらすものです。教師がどのようなことから離職意思を抱き、どのようにして勤務継続へと至るのか、そのプロセスを数度のインタビューを通じてTEM図という形で示すことができたことは、今後の教師への支援方法を検討する上で重要であり、貴重な知見が得られたと考えられます。

久保田 進也